捨てられた聖女

konakusa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
捨てられた聖女

【Ｎコード】
Ｎ９５８３Ｚ

【作者名】
ｋｏｎａｋｕｓａ

【あらすじ】
いきなりの事だった、センター試験間近な私におこった出来事
聖女と言う称号と、聖女の最後のお話
ここは、異世界？　そんなファンタジーな話があるものか！！

聖女　０（前書き）

短い話です、面白いかどうかは分かりませんが読んでくれたらありがたいです

聖女　0

楽しかった時間は長く長く、そして思い出となってしまっていた

あのころは、ずっと必死で、生きていくのに必死で好かれるのに必死だった

異世界と呼ばれる物をご存知だろうか？

今まで生きてきた世界とは、まったく違う世界の事だ

と、いっても。まったく違う世界とは言いきれない世界

しかし、決定的に違う物があったら、それは異世界と言うしか説明できない物があったら

素直に受け入れるしか方法はない

高校三年生の冬、１２月に入る頃の事

推薦入試に見事滑った私は、センター試験を受けるために塾に通い勉強をして家に帰り寝る生活を送っていた

憂鬱な生活が続き、推薦で受かった生徒はセンターを受ける生徒のピリピリした空気を感じ取り教室は静かだった

そして、私にとって人生を大きく変える出来事が起こってしまう

塾を終え、頭に詰め込んできた物理の公式を忘れないように口に出して覚えて電車に乗り家に帰宅した

推薦に落ちた時の喪失感とセンターでの焦りで頭がここ最近痛くなる

その日も、夕ご飯を食べず痛くなってきた頭で布団に入った

入ったはずの私だった

もし、この時私が眠らずに夕ご飯をとっていたらどうだったんだろうか？

運命は、変わってくれたんだろうか？

もしくは、食べている最中に事は始まってしまったんだろうか？

でも、それも今ではどうでもいいことなんだろう

もう、私には時間がないのだから・・・・・・

聖女　1

「よくいらしゃいました、我が世界を救ってくれる救世主・聖女様」

よく覚えていないけど、多分こんなような言葉だったろうか？

自分の部屋の自分のベットの布団で寝ていた私の目の前には、今までお目にかかった事もないほどの美形な男がいた

眠りから覚めた私だったが、頭がまだ回転していない中、その美形な男から、ここは異世界で世界の危機だからあなたに救ってほしいなどとふざけたセリフをもらった

美形ながら変な言葉を言うものだと思いながら、私のまわりを確認する

服は昨日家に帰って着替えていなかったので、高校の紺色の制服を着ていた

ベットがなくなっている代わりに布団があった

それ以外に、私物はない

あったとすれば、制服に入れといた単語帳とアメと携帯電話と財布だった

私物確認が出来た私は次に辺りを見渡す

薄暗いためによく見えないが、ここは多分宗教的な建物なのだろう

私の後ろに、大仏の様なしかしすこし不格好な姿の像があったからだ

そして、この建物の中には見渡す限り２０名ほどの性別不明の人たちがいたからだ

不明なのは、目の前にいる男以外はフードで全体を被っている為だ

そこで、思い当たった私の考えは簡単だった

「意味が分かりませんが、宗教とかそういう関係で私はさらわれたのでしょうか？　異世界といわれても私はピンとこないし信じられないんですよ」

多分私は、超現実主義者だと自覚しているからだ

今、思い出すと最近続いていた頭痛と、昨日の制服のまま寝てしまった私は何かおかしかったとしか言いようがない

これは考えすぎかもしれないが、私の部屋にこのへんな連中が睡眠ガスや頭痛を引き起こす何かを頭痛がした何日か前から撒いておき、時期を狙い起きない私を部屋からどうやってか拉致、そして今この様な部屋に連れてきてこの様な演技をしているのではないか？

私の高校の先生から聞いた話だが、悪質な宗教団体などに捕まってしまったらその教えを完全に鵜呑みにしてしまう人と言うのは本当にいて、いくら犯罪行為に走ったとしても教えなのだからと、罪悪感もなく実効してしまうのだという

この人たちも、そのような集団なのだろうと言うのが私の、その時

の仮説だった

しかし・・・・・・

「この世界は、今魔王なるものの手によって土地は腐敗し人々は殺され、数ヶ月前には、魔王誕生の地からほど近い場所にあった軍事大国が崩壊してしまいました。　我が手を尽くしましたが、魔王そしてその臣下にいる魔族の進行は止まるところを知らず、今なお多くの国が危機に陥っています」

先ほどの私の言葉を華麗に無視し、この世界の現状を説明してくる美形な男

私は、布団から体をだしどうやったらこの頭がイカれた人がいる場所から逃げれるかを考えていた

魔王？　魔族？　どこぞのファンタジーゲーム？

「先も言いましたが、私はあなた方の茶番に付き合っているほど時間はないんです、もうすぐセンター試験も近いんです」

度胸だけは、人一倍ある私だからこそ声にだして言える

多少自分のなかでこんなこと言って大丈夫かな？　などと言う感情もあったが、言ってしまった物はしょうがない

しかし、この男は今度は少し困ったような顔をすると私に手を差し伸べてきます

いくら美形といっても、人様を拉致してくるような人間だ

手を取ってしまえば危ない

私は、彼の手を借りずに立ち上がると、彼も少し驚いたような顔をしたが今度は、少し泣きそうな目をしていた

「今日は、疲れたでしょう。　この建物は、王宮管轄の神殿なので王宮は目と鼻の先にあります。　そこで今日は休んでください」

でも、私は今起きたばかり何ですが、などと思いながらも、逆らったらまずいかな？　と、こちらへどうぞと言う彼についていく

歩いている中で、外が夜なことに気がつきおかしいな？　と思った。

もし彼らが私を拉致してきたなら相当時間がかかったはずだ

私が自分の部屋で寝たのは１１時頃で、建物の窓はまだ暗く太陽すら出るほど明るくない

つまり、今はまだ寝た１１から５時間から６時間しかたっていないと言うことだ

でも、こんなでかい建物は、このあたりにはなかったし、建てるにしてもこんな宗教団体の建物だ

街中ということはないだろう

ということは、ここはどこか田舎もしくは山の中と言うことも考えられる

だけど、私が居たのは日本の首都で、いくら日本がたるんだ国だからとここまで怪しい集団にこのような場所を首都に提供するはずがない

ましてや、首都の土地なんて高いはずだからここまで広い土地を買うのだって資金的に無理な気がするからここは、首都ではないだろうと、するとここは、最低でも土地があまり高くなくそして過疎化が進んでいる地域と言うことになるだろう

そして、ここが異世界でないと言う決定的なことは彼が日本語を使っていることだった

異世界だというなら、何故彼は日本語を喋ることが出来る？　それが、ここが異世界でなく日本だという事を決定づけているではないか

そうこう考えている間に、私と彼は神殿と呼ばれる建物から出た、出てしまった・・・・・・・・

「何？　・・・これ」

私が予想した通りにここは、この神殿は山の上にあった

この建物は山の上にあったのだ、しかし山から見える光景に私は自分の目を疑う

「この王宮はね、魔王が現れてから急ピッチでつくられた建物なんだよ。　なぜ山の上かと言うとまぁ、わかるよね？　敵の攻撃を避けるためだよ。　街の真ん中にこんな大きな建物があったら標的に

なってしまう」

私の目の前、山の下には街が建っていた

日本のような木造建築でつくられた建物ではない、レンガの建物だ

いや、日本も最近そんな家が増えてきているからありえなくもない

でも、あれは過疎化が進んだ地域にしては大きい町だ

山の上から見ているのに、分かる

そこは、大都市だと

「この国の名前はカーネス王国そしてあそこはカーネスの王都。

この国最大の都市だよ」

私の横からは、丸でそれが事実と言うような迫力ある声が聞こえる

「そして、人類の最後の砦の国だ」

聖女　2

神殿と呼ばれる建物を出た私は、山の頂上から見た大都市をみて絶望を感じていた

そばにいた美形な彼から見たら、あの都市を見て感動している私という姿見見えたのだろう

「さ、行きましょうか。　素晴らしいのはこの王宮も同じですよ」

などと、言った

でも、そんなんではなかった

考えて考えて結論づけた、ここは日本ではないのだと

いくらなんでも、あの大都市を宗教団体が作れる分けもなく、ましてやあんな大きな都市が知られていないと言うことはありはしない

仮にここが日本だとしても、あれほど美しいレンガで作られている街が観光名所にならないわけがない

つまり、ここは日本ではない

そう、日本ではないだけかもしれないのだ

往生際が悪い私は、次にここがどこか別の国だと思うことにしていた

だからか、思っていた

いつかは、絶対に日本に帰れると。

でも、次の日には私の希望はあっという間に打ち砕かれたんだ

救世主、そんな言葉を次の日、異世界2日目からよく言われるようになった

私に話しかけてきた美形な男は、この国の第一王子だと昨日の夜、部屋に入るときに言われた

しかし、私は「へぇ」としか言わず、王子は部屋を出て行き私は部屋で今までの出来事を整理した

この国の王子と言う奴が言った、ここは異世界などという馬鹿げた言葉を否定する私なりの答えを見つける事にした

眠くはない、先ほどまでずっと寝ていた訳だから、考える時間はあった

この世界を私なりに否定する答えを求めた

そして見つけた

でも、そんな浅はかな私の希望もあっさりと打ち砕くかのように、次の日の王との謁見で見ることとなる

魔法

おとぎ話で、たまに魔女などが使う不思議な力がこの世界にはあった

私たちの世界にない、魔法というものが有ってしまった

〈私の希望は、異世界などというものを証明することは誰にもできない、だからここが私の世界でないと証明できるものは何もない。
私は他の国に拉致されただけなんだ〉

だから、戻れるんだ。　私の家に・・・・・・

王は言った

「魔王は、強大な負の魔力で我々人間を殺している。　負のエネルギーは人間に宿る魔力では太刀打ちできない、だから貴殿が必要なのだ。　負の魔力と相反する魔力をもつ聖女、つまりそなたがだ」

つまり、私に魔王なるものを倒すのはお前で倒せるのもお前で倒さなくてはいけないのもお前だと

この世界になにもしてやる義理はないはずの私に、王はそういった

でも、そこで疑問が生じる

私にそんな力があるのかと？　いままでのんびりと平和の世界で過ごしてきた私にそんな力があるのかと

叫びたかった、そしてふざけるなと言いたかった

でも、でもだめだった。　直感が、私の直感が継げている、何もしゃべるな

逆らえば殺されるのだと、生きられなくなるのだと

そして、魔王を倒すための準備が始まった

私は、自分の魔力を掴むため魔導士のコーチの元、一週間と短い期間で寝る間も省いて勉強させ、られた

コーチをした魔導士は、２０代ほどの若い女性魔導士で、私に分からないことはやさしくではなかったが、分かるように教えてくれた

私をここまで連れてきたこの国の王子も、一週間の間に何回も私と話をしてくれて二人とはすぐに仲良くなった

そこでしったのは、何故言語が違わないのかと言うのは、私を召喚する時に魔方陣に組み込まれていたもので、完全翻訳機能が私には備わっているかららしい

魔王に相反する私に魔力は、正の魔力。　光の力なのだそだ

人間は、誰しも魔力を持っているが使えるのが四大元素、火・土・水・風の魔力だけだ

聖女の私は、光の魔力・一般知識では正の魔力

魔王の魔力は闇の魔力・一般知識では負の魔力

魔王を殺せるのは聖女の正の力であり聖女を殺せるのは魔王の負の魔力だけだ

これまで、魔王は2度この世界に誕生する、そしてそのどれもが異世界の聖女によって葬られているのだそうだ

そして、聖女は役目を終えると（つまり魔王が死ぬと）負の魔力を吸収して、異界への扉を開く

胡散臭い話だと思うけど、そんなような話を私は聞かされ信じてしまった

準備が整った

私は魔力を完璧にないにしろ操ることに成功していた

そして旅立ち

魔王討滅の為に集まったのは、魔導士が私をコーチしてくれたラミダ、剣士には王子のギル、遠距離攻撃に魔導士のサラサと弓使いのルーク、回復には王女のリーネの6名の旅となった

多くの国民に讃えられながら私たちは最初に、この国から程近い小国カリアドに向かう

旅には徒歩と言うはけではなく、馬車で向かった

途中、山賊に何度も遭遇しそして、私も人を殺す

初めての日は、泣き崩れた

辛い、苦しい、死にたい、ごめんなさい

だれでもいいから私を責めてほしかった、なんで殺したのと責めてほしかった

だけど、答えは決まって「よく殺したな、次も殺していけよ」

なんて残酷な言葉、でもこれしか、この言葉しか誰もかけてくれはしなかった

そして、旅は順調に進み、順調に私をこわしていく

４度目の山賊との遭遇には、すでに殺しというものに私は慣れてしまっていた

殺しても、殺してもなにに思わなかった

そんな時、そんな私に声をかけてくれたのがギル王子だった

彼は言う、「ごめん、ごめんな。君を傷つけたいわけではない、悲しませたいわけではない。でも俺は君を傷つけることしか与えてやれない」

悲しそうな彼の言葉は、私の心を暖かくしていった

私は、こんなにも思われているのだと

旅が進に連れて、魔族が現れ始めた

魔族は、人間の形をした生き物だった

彼らの言葉は、完全翻訳機能がついている私にすら何を言っているのか分からない言葉だった

2つ彼らが人間と違う物があった、一つは言語、そして一つは瞳だ

人間は、私と同じ黒目しかいない

しかし、彼らの目は赤いのだ

血塗られた赤なのだ

私は毎日のように魔族と殺し合いをした

魔王が近くにいる証拠だった

そして、ついに魔王の城にたどり着く

奇跡的に、これまでの旅で傷ついたり死んだりしたものはいない

そして、これまた奇跡的に、ギル王子は私の恋人になっていた

もし、もし魔王が死んで元の世界に帰るとしてもギル王子も来てくれると言った

うれしかった、泣いた

そして、私は今魔王の前にいる

目の前の魔王は若い２０歳代の男だった、もう決着はついたようなものだった

彼は腹を刺され、もう目も朦朧としている

私は最後の情けと、首を切り楽にさせようと聖剣を振り上げた時だった

「何故だ、何故我々が負けねばならない」

魔王が、始めて口を開く

魔王は魔族と違い、人間の言葉を話せるようだ

私は言った、お前たちが人間を死に貶めるからだ

「死？　人間？　・・・・・・そうか、お前は知らないのか。我らの歴史を」

そして、魔王は目を私に向けて言った

「・・・・俺たちも、人間なのだ。　差別され続けている人間なんだよ」

血を吐き出しながらも、しゃべり続ける魔王

この世界には、人間とよばれる種族がいる

そして、長い歴史の中、人間はまた人間の中に格差を作り差別を作る種族だった

人間の中には、黒の目を持つものを上位種、赤の目を持つものを下位種としていた

上位種の人間は、下位種の人間を差別し奴隷のように扱った

しかし、長い歴史の中で下位種の人間の中にそれは違うのではないかと叫ぶ男が現れた

1人目の魔王であった、彼は下位種の人間を率いて上位種の人間の国を倒す

そして、叫ぶ

「人は平等だ、何故我々は目の色だけで差別されねばいけない」

当然、下位種の人間が歯向かったことに怒り、上位種の人間は戦う

しかし、初めに反旗を起こした男は、神から力を授かっていた

絶対的な闇の魔力だ、闇を制御するための魔力だった

上位種の人間は、意味の分からない力を使う人間を恐れ、彼らと同類と言うのを消し去り

彼らを新たな世界の敵、魔王と魔族といい始める

そして、人間として悪の根源の魔王を倒すため別世界の扉を開き生贄を召喚する事を考える

そして、最初に召喚されたのは、１５歳の少女だった

そして、物語は彼女と同じように進む

おかしいな、とは思っていた

だって、魔族と人間の違いが瞳の色だけだなんておかしいと思っていた

しかし、彼らも人間んだったなんて、差別されていただけの人間だった何て・・・・・

「時に、お嬢さん。　君の名前はなんと言うんだい？」

最後の力を振り絞り喋る人間の青年がそこにいる、魔王ではなく人間の青年だった

「わ、私は・・・・・」

わたしは・・・

「なんで、泣くなよ私、泣かないでよ」

気がつくと目から涙がこぼれていた

だって、名前が、名前が思い出せなかった

そういえばそうだ、もう一年以上呼ばれていない名前

仲間からも、なんという名前かも尋ねられなければ呼ばれることも
なかった名前

そうか、私は・・・・・

「君は、使い捨ての聖女なのか・・・・・」

仲間はもういない、この場所にはいない

時期にこの空間は闇に飲み込まれ消え去るのだから

仲間は、もう私を置いて帰ってしまった

「いえ、彼らは、もともと仲間ではなかったわね・・・・・」

そして、最後に見たのは魔王の冷たい死体だけだった

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9583z/

捨てられた聖女

2011年12月29日22時45分発行